

# プロ野球ドラフト制度についての研究

## A study of draft system for the Japanese professional baseball league

1K04B229-5

山口 裕起

指導教員

主査 間野義之先生

副査 葛西順一先生

### 緒言

近年、プロ野球球団による学生選手に対する裏金供与が相次いで発覚し問題となった。裏金を受け取った選手はいずれもドラフト候補に挙がる有力選手である。ドラフトとは「球界全体のモラルの確立」や「契約金の抑制の高騰」や「戦力の均衡」のために始まった制度である。中でも戦力均衡は試合という商品を作り物とするプロスポーツ興業にとって最も重要である。しかし、逆指名制度の導入など、一部選手が自由競争のもと獲得されるようになり、「戦力不均衡」「裏金問題」などが問題視されるようになった。前述の裏金問題はプロ野球のドラフト制度が抱える問題点が表面化したものであると考えてよいだろう。このようなことから今後のプロ野球の健全な発展にはドラフト制度の改革が不可欠であると考えられる。

### 目的・方法

本研究の目的は、ドラフトの歴史を検証し、これまで採用されてきた制度のメリット・デメリットを抽出し、今後プロ野球のドラフトはどのようなシステムによって行われていくのが理想的かについて考察を行うことを目的とする。調査は文献によって行う。

### ドラフトの歴史

プロ野球 1936 年の創立以来、新人選手の獲得を自由競争で行ってきた。しかし、戦後になりプロ野球の社会的認知度が高まってくると、有望な新人選手に対する契約金の高騰という問題が起こるようになった。このような契約金の高騰は球団経営を圧迫し大半の球団が財政危機に陥った。その結果、資金力のある球団とない球団の差が拡大した。これらが問題視される中、1964 年に MLB がドラフト制度を採用した。これに習い、日本のプロ野球でも 1965 年からドラフト制度が導入された。

過去に採用されたドラフト制度は以下の通りである。

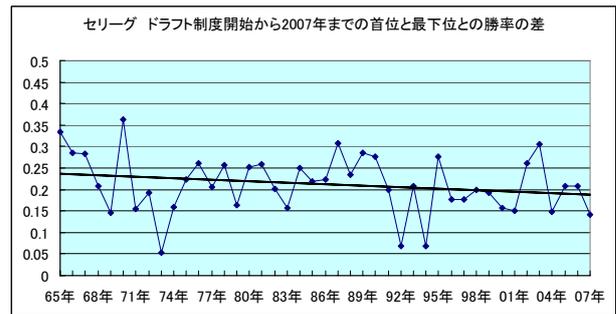
- ・名簿提出・重複選手抽選方式
- ・指名順位を抽選により決定する方式
- ・上位抽選、下位ウェーバー方式
- ・逆指名方式
- ・自由獲得枠方式
- ・高校/大学・社会人分離ドラフト方式

### ドラフト制度とペナントの関係

#### I. 首位と最下位の勝率差

1965 年にドラフト制度が施行され、ドラフト制度採

用後、年々首位と最下位との勝率の差にばらつきはあるが、全体的に見ると、その差は埋まっている。



#### II. ドラフト制度と巨人の優勝回数との関係

ドラフト制度開始前 10 年間で 7 回優勝の優勝確率 70%だが、制度開始からドラフトの最も大きな変革(逆指名制度採用)を遂げた 1993 年までの 29 年間では 15 回優勝、確率 51.7%に減少し、変革後から 2007 年現在にいたるまでは 14 年間で 5 回の優勝、優勝確率 35.7%にまで減少した。

#### III 自由競争の Jリーグとドラフト制のプロ野球

Jリーグ発足時の 1993 年から 2007 年までの優勝チーム数を比較すると、18 チーム中 7 チームが優勝した Jリーグに対しプロ野球は 12 チーム中 9 チームが優勝を経験している

### 考察

調査の結果をふまえ、これまで制度を変えながら続いてきたドラフト制度はどれも長所と短所を抱えていたということがええ本研究をふまえ、私は指定枠(自由獲得枠、希望枠のようなもの)を各チーム 1 つ枠を与え、2 巡目以降は、ウェーバー制というものである。理由として以下の 3 つを挙げる。

- ① 指定枠をひとつに限定することで、プロ入りを目指す選手のモチベーションとなることが期待できる。
- ② 選手に球団選択権を与えないことは、MLB への選手流出の要因となる可能性がある、
- ③ 過去を振り返っても、自由獲得枠(逆指名、希望枠)を採用していた時期に、必ずしも球団間の戦力差が広がったとは言えない。

しかしながら、指定枠を設けることは裏金の温床となる可能性を孕んでいる。このような事態を回避するために、専門調査期間を設け、厳しい監視体制を組む必要があるだろう。